

伊東マンショ神父とカミロ・コンスタンチオ神父 二人の友情とコンスタンチオ神父の殉教

高田重孝

誕生

カミロ・コンスタンチオ神父は 1572 年イタリアのナポリ王国カラブリア地方コセンザに生まれた。

初めての出会い

1585 年 3 月 22 日から 6 月 3 日まで、伊東マンショ（16 歳）と三人の天正遣欧使節はローマに滞在しているので、この時、カミロ・コンスタンチオ少年（13 歳）はローマ入場行進での馬上の遣欧使節四少年達を憧れの気持ちで持って見つめていたであろう。それに続くグレゴリオ 13 世の華麗な謁見式、グレゴリオの 13 世の荘厳な葬式、シスト 5 世の戴冠式でのローブの裾を持って入場する東洋の四少年を輝く瞳で見つめていたと考えられる。はるか彼方の東洋の国から来てヴァチカン大聖堂に於いて眩しいくらいに輝いている 4 少年の主席・伊東マンショとともに自分が人生を歩み、すべてを分かち合う親友になると、この時カミロ少年には想像できたであろうか。神はカミロ・コンスタンチオ少年の生涯をこの幼い日の出会いの中に、すでにその本質に於いて、残すところなく顕わしているのではないだろうか。カミロ少年は神がカミロ少年のためにだけ引かれた神の示す道をこの時ぼんやりと感じたのではないだろうか。カミロ少年のこの一方的な出会いの中にすでに神の摂理を見ることが出来る。初めカミロ少年はナポリで民法を学び、フランドース戦争の時、ひと時スペイン軍に勤務している。その後ナポリで神学を学び、ナポリの町で貧困に喘ぐ労働者の組を世話していた。神学を学んでいたとき『立派な死に方が生涯に名誉を与える・Un bel morir tutta la vita honora.』という思想を座右の銘に掲げている。

1598 年、26 歳のときイエズス会に入会。海外の宣教地としてシナ（中国）へ行くことを希望して 1602 年（30 歳）、イタリアからインドに向けて出発した。インドには長く留まらず、モンsoon 時期（冬）にマカオに移動した。同じ時期、マカオにはヴァリニャーノ神父がいてコンスタンチオ神父を日本に行くように導いた。1601 年から 1604 年までマカオのコレジオで伊東マンショと中浦ジュリアンが学んでいるので、この時マカオに於いてコンスタンチオ神父は彼らと初めて出会い約 2 年間をともに過ごしている。この出会いの時、17 年前のローマでの華麗な式典の主人公達のうち 2 人の少年使節が今や同じ神の道を歩む仲間としてカミロの目の前に立っていた。荘厳な葬儀、華やかな戴冠式の思い出の中の王子達、憧れの目で見つめていた東洋の貴人達と共にこれから人生を共に歩むという道を神ははっきりとお示しになった。この時、カミロにはっきりと神の示す道が見えてきた。『彼らと共に日本に行こう。伊東マンショと共に日本のために働こう。』カミロはそう決心したに違いない。

日本語の学び

1604年（慶長9年）一足先に伊東マンショは日本に帰国して、長崎のコレジオで働き始めた。

1605年（慶長10年・33歳）コンスタンチオ神父来日、長崎で出迎えたのは伊東マンショだった。その後、コンスタンチオ神父は有馬のセミナリオで日本語を2年間学んでいる。この年『サカラメンタ提要』が長崎で出版された。日本で初めての2色刷りによるグレゴリオ聖歌19曲を納めた司祭のための典礼書。伊東マンショ神父も出版に係わっている。

1606年（慶長11年）伊東マンショ、有馬のセミナリオのラテン語と音楽の助教授となり、マンショとコンスタンチオは有馬に於いて2度目の再会をして共に1年を過ごしている。

小倉赴任

1607年（慶長12年）2月、コンスタンチオ神父（35歳）は小倉に赴任した。コンスタンチオ神父は容姿端麗、背が高く、謙虚で勤勉、信徒達の誰からも愛された。

『コンスタンチオ神父は、日本キリシタン一同と聖なる結婚をした。』といわれていたほど日本人を愛し日本人と日本の教会のために全身全霊を打ち込んで働いていた。次の年、

1608年（慶長13年）、司祭に叙階された伊東マンショ神父（39歳）がセスペデス神父の伴侶（助け）として小倉に赴任してきた。伊東マンショ神父とコンスタンチオ神父との3度目の出会いの場所が小倉だった。2人は年齢も近く同じ神父として共に働くようになった。4年間の小倉教会での2人の働きは、喜びも悲しみもともに分かち合う兄弟の様になり、神のため、人々のために身を粉にして宣教に打ち込んでいた。カミロ神父はこの頃から日本の歴史と仏教について研究を始めている。

1609年、カミロ・コンスタンチオ神父はアンデレ斉藤修道士と共に長門・周防（山口・萩）に伝道に出かけた。コンスタンチオ神父の長身で容姿端麗な姿から一目で神父と判り、殺害の危険に晒（さら）されるため、アンデレ斉藤はコンスタンチオ神父の身の安全のため小倉に返し、1人ですべての伝道計画を引き受けその地方を巡回して多くのキリシタン達に慰めを与え、その年の伝道計画を成功に導いている。次の年1610年、カミロ・コンスタンチオ神父に代わり、小倉教会に於けるただ一人の日本人司祭、伊東マンショ神父が長門・周防に宣教の巡回に出た。前年の経験を生かしてアンデレ斉藤が伊東マンショ神父の道案内をして長門・周防地方のキリシタン達を訪れ、慰めを与え、告解を聴き、秘蹟を授け、ミサに与らせている。差し迫った迫害に備えるために信徒組織（コンフラリア）を構築した。

【長門・周防への伝道】

イエズス会の指導者達、及び九州地区菅区長セルケイラ司教達は、長門・周防、九州の東部、豊後及び日向領で新たに布教を始めようと考え、その重責を伊東マンショ神父に託した。交通の要衝、小倉は地理的位置により優れた宣教地だった。北には下関海峡を挟んで、

かつてフランシスコ・ザビエルが初めて日本にキリスト教を広めた山口（長門・周防）があり、南には元キリシタン大名・大友宗麟の領地・豊後、及び伊東マンショ神父の故郷・日向の国があった。小倉教会の巡回地域として、長門・周防が属していた。1600年、ザビエルが山口で福音を述べ伝えてからすでに50年は経過しているため、信徒組織の指導者達は2世、あるいは3世へと代変わりをしてきたと推測される。また他の土地から山口に移ってきた信仰の勇者（武士や医者等の知識階級の人々）が山口の信徒組織の指導者となっている。さらに10年後（ザビエルが山口に福音を伝えてから60年後）1609年、カミロ・コンスタンチオ神父はアンデレ齊藤修道士と共に長門・周防（山口・萩）へ伝道に出かけた。コンスタンチオ神父の長身で容姿端麗な姿から一目で神父と判り、殺害の危険に晒（さら）されるため、アンデレ齊藤はコンスタンチオ神父の身の安全のため小倉に返し、一人ですべての伝道計画を引き受けその地方を巡回して多くのキリシタン達に慰めを与え、その年の伝道計画を成功に導いている。次の年1610年、カミロ・コンスタンチオ神父に代わり、小倉教会に於けるただ一人の日本人司祭、伊東マンショ神父が長門・周防に宣教の巡回に出た。前年の経験を生かしてアンデレ齊藤が伊東マンショ神父の道案内をして長門・周防地方のキリシタン達を訪れ、慰めを与え、告解を聴き、秘蹟を授け、ミサに与らせている。差し迫った迫害に備えるために周防国、岩国5名、周防国、玖珂4名、長門国、萩8名を指導者に任命して、信徒組織・コンフラリアを構築した。（1617年、コーロス徴収文書より）

【1617年・元和3年、コーロス徴収文書による記録】

コーロス徴収文書とは1617年（元和3）9月7日周防国・岩国。9月3日周防国・玖珂（くが）。8月18日長門国・萩。3つの町のキリシタンの代表者達がイエズス会日本管区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、岩国5名、玖珂（くが）4名、萩8名の指導者の名前が記録されている。

周防国、岩国のキリシタン代表者の名簿 5名 1045～1046頁

小笠原はうろ、小笠原いなしよ、竹田了悟、西沢平とろ、平野志門。

小笠原アンドレ【アンドウレース】元は豊後大友宗麟の家臣で、豊臣秀吉の九州征伐（1587年）前後に大阪に移住。キリシタン大名アウグスティニョ小西行長に仕官して、キリシタン大阪信徒組織の中心人物になっていた。小笠原アンドレ夫人のアガタが天正年間（1573～1591）に孤児救済事業を始めた。細川ガラシャ夫人に仕えていた清原マリアも細川ガラシャと共にこの事業に参加、受洗後ガラシャは積極的に細川亭邸内に数名の孤児を引き取り養育していた。小笠原アンドレがいつから薩摩・島津家久に仕える様になったかは不明。おそらく1600年の肥後から薩摩への避難後に、島津家久に気に入られて仕える様になったと推測される。アンドウレース小笠原は1609年4月に島津家久によって薩摩から追放され

たが 1616 年のキリシタン史に再び現れる。岩国で吉川弘政につかえていた。その年の 12 月、一人の宣教師（石田アントニオ神父）が彼の家で御降誕の祝日のミサを捧げた。1617 年のコーロス徴収文書に署名した岩国のキリシタン代表者の中にパウロ小笠原、イグナチオ小笠原がいた。

* 『芸備のキリシタン史料』 426 頁 H・チースリク著

周防国、玖珂（くが）のキリシタン代表者の名簿 4名 1046～1047 頁

繁沢志摩守阿くす地いの、蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよ。

筆頭に署名している「繁沢志摩守阿くす地いの」とは、阿川毛利家二代目・毛利（元繁沢）志摩守元景であり、元景の妻・マルガリタは毛利秀包（1567～1601 年）と大友宗麟の娘マセンシアの間に生まれた娘である。1622 年（元和 8 年）イエズス会年報『周防の国のあるところに、豊後のフランシスコ（大友宗麟）王の孫に当たる夫人が住んでいる。彼女はマルガリタと言ひ、その信仰は彼女の祖父に決して劣らない』と書かれている。

蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよとは、阿川毛利家臣のキリシタン達である。

長門国、萩のキリシタン代表者の名簿 8名 1047～1048 頁

木村左太夫満所、三輪七良右衛門如庵、岩倉久左衛門登明、福岡隼人了悟、榎村九左衛門、財間弥七判字路、木村五右衛門伴ふ路、児玉与左衛門利庵。

* 『近世初期日本関係南蛮史料の研究』 松田毅一 風間書房 1967
第六章 元和三年、イエズス会士コーロス徴収文書 1022～1145 頁

【伊東マンショ神父に報告された長門・周防の現状】

しかし、過去のイエズス会の情報により伊東マンショ神父が知りえた長門・周防での非常に困難な宣教の状態は、目を覆いたくなる戦慄する殺戮と迫害が毛利輝元により展開されていた。

メルキオール熊谷元直一族の殉教

イエズス会『1605 五年度日本年報』によると、1605 年（慶長 10 年）8 月 16 日、毛利家の重臣であり、長門教会の柱石メルキオール熊谷元直（50 歳）が、萩に於いて、一族 11 名とともに処刑され殉教している。

メルキオール熊谷豊前守元直は斬首。メルキオールの妻、次男・二郎兵衛、末子・フランシスコ猪之介、（熊谷元直の娘婿）天野元信、元信の子・与吉（11 歳）、お快（8 歳）くま（2 歳）、幼児、（熊谷元直妻の弟）佐波善内（次郎右衛門）、三輪八郎兵衛元佑、中原善兵衛、一族 11 名は寺院に閉じ込められて焼き殺された。また、メルキオール熊谷元直

と天野元信の大勢の家来達、当時キリシタンの間に流布した噂によれば、殺害されたその数は約 100 人以上といわれていた。

『(メルキオール熊谷元直)はその時(斬首による処刑)のために少し準備をさせてほしい、といとも穏やかに請うた。部屋に入って、別の上等の着物に着替え、首に聖遺物入れをかけ、聖画像の前に跪坐し、そこで、祈祷中に斬首された。そして、首級は彼の着物に包まれて毛利殿のもとに運ばれた。彼はメルキオールの死に満足せず、自分と親戚関係にある者を除いて、彼の妻、子、孫をも殺すように命じ、全員をいっしょにして寺院で焼かせた。同じように、紛争の当事者の一方であったメルキオールの婿(天野元信)をも、メルキオールとその婿の大勢の家来たちをも殺させた。その数は、噂によれば百人を超えた。』

(ジョアン・ロドゥリーゲス・ジランの書簡)

*参考文献

熊谷豊前守元直の殺害【殉教】の明細な記録については下記の文献を参照してください。

*『熊谷豊前守元直』あるキリシタン武士の生涯と殉教 H・チースリク著

キリシタン文化研究シリーズ 17、キリシタン文化研究会

*長防切支丹誌・改訂版 アウグスチノ岩崎太郎著 自家本

『訴訟事件に関係したこの他の者たちも一すべてキリシタンであるが一処刑された。佐波善内はその夜ちょうど熊谷の屋敷にいて殺された。三輪八郎兵衛元裕と中原善兵衛は、同じくそれぞれの自宅で襲撃され、殺害された。このうち中原だけは、抵抗を試みて武士たちと乱闘に及んだと報じられている。その他一連の人々が追放に処せられた。「熊谷家文書」中に含まれる一つの覚書によれば、全部で 11 人が殺害され、6 人が追放されたことになっている。』70 頁

*『熊谷豊前守元直』H・チースリク著 キリシタン文化研究シリーズ 17

『次に、その家臣はその場におり一部始終を見た後無事に存命していたことである。しかも元直一家が殺された後、屋敷の中で居合わせた家臣が殺されたとか包囲していた者との間に切り合いがあつて、多くの死傷者が出たとか言う事は一言も言っていない。大体そのような事が起こるならば誅殺の一部始終を居合わせて証言できる家臣などいるはずがないのである。後述するが中原善兵衛とか三輪八郎兵衛に対しての上意討ちでは、執行者が死んでいるが数は知れている。これまた後述するが熊谷一党として追放された者が何名はいるもののそれを犠牲者として考えて数に入れるとしても 20 人にも満たない。パジェス(イエズス会の記録)が 100 人以上の犠牲者が出たというのは何を根拠にしているのか真に疑わしい。戦国時代の戦闘それ自体で 100 人の死者が出る等という事は大変な事である。』51～52 頁

『いずれにせよ、確証はないが 100 人以上の犠牲者というのは、飽くまでもイエズス会年報の言う様に噂であったと考えるべきであろう。』 67 頁

*熊谷元直等誅殺事件 36~73 頁 長防切支丹誌・改訂版 アウグスチノ岩崎太郎著 自家本

盲目の伝道師ダミアンの殉教

その 3 日後、1605 年（慶長 10 年）8 月 19 日夜、盲目の伝道師ダミアン（45 歳）が、湯田一本松の処刑場に於いて、斬首に処せられ殉教している。

『(ダミアンは) 処刑される予定の場所に着くと、すぐに跪坐し、大声で幾つかの祈りを唱え、それから、暫時心の中で祈り、最後に、しっかりと何の動揺も悲しみも見せず、むしろ、それを永久に享受しに行く人のように大いなる安らぎと喜びを見せて首を伸べ、一撃を受け、斬首された。』
(ジョアン・ロドゥリーゲス・ジランの書簡)

斬首されたダミアンの遺体は、細かく切断され川に流された。次の日の早朝、仲間の信徒（ベント）が捜索し、川沿いの木立の中に、隠し忘れたダミアンの首と片腕を見つけた。殉教者ダミアンの遺骸は鄭重に長崎のセルケイラ司教の元に届けられ、1601 年に建てられた長崎の岬の突端に建てられた『被昇天のサンタ・マリア教会堂の礼拝堂に安置された。』と述べられている。被昇天のサンタ・マリア教会は現長崎県庁付近にあった。

*参考史料

セルケイラ司教の報告書 1606 年 3 月 10 日付け

1605 年 8 月 19 日、一人の日本人のキリシタン、ダミアンという盲人がキリストの信仰のために山口で遂げられた死去について 91~132 頁

『熊谷豊前守元直』あるキリシタン武士の生涯と殉教 H・チースリク著

キリシタン文化研究シリーズ 17、キリシタン文化研究会

1607 年（慶長 12 年）、山口教会の中心人物、ユスティノ狩野与五郎とその妻が、湯田一本松に於いて、火刑に処せられ殉教している

『三日間、山口の街路を引き回して恥辱を与えた後に生きたまま火焙りにした。』

(ジョアン・ロドゥリーゲス・ジラン、1613 年 1 月 12 日付の書簡)

長門教会の柱石・メルキオール熊谷元直、盲目の伝道師・ダミアン、信徒達の中心・ユスティノ狩野与五郎を失って以来、長門・周防の教会は閉鎖され、神父は訪れることができなかった。イエズス会『1611 年度日本年報』には、『昨年（1609 年）そこ（萩）に行った

のは修道士【アンデレ斉藤】だけであったので・・・』とある。ともに行ったカミロ・コンスタンチオ神父はその容貌で神父であることが一目で判り、逮捕され殺害される危険があまりに大きかったので、旅を途中で断念して日本人の修道士【アンデレ斉藤】だけが迫害下の信徒達を訪ねている。小倉にいる 3 人の神父のうち、日本人は伊東マンショ神父だけであり、迫害の激しい萩・山口に、怪しまれずに潜入して宣教活動を遂行できるただひとりの司祭だった。逮捕されれば殺害される危険を犯してまで遂行しなければならない宣教の旅。伊東マンショ神父の心の葛藤と不安、斬首、火焙りなど、死への恐怖と戦慄は計り知れないものがあつた。また、伊東マンショ神父の心を苦しめた懐疑と葛藤に『神の沈黙』があつた。本来、キリスト教は、人を励まし希望を抱かせ、幸せに生きるためにある宗教なのに、なぜ、そのキリストを信じる信仰故に、悲しみ苦しみ、迫害されて拷問を受け殺されるのか、なぜ、神は黙しておられるのか、祈りのうちに問いかけても答えのない不条理の重圧に伊東マンショ神父の心は押し潰されていた。キリストを信じる故に殺されるといふ、あり得ない事、起こってはならない事が、伊東マンショ神父の前に現実として起こっていた。神父としてなにもできない無力感に打ちのめされていた。信徒達を見捨てるのか、キリストを棄てて生きるのか、キリストを棄てずに自分が殉教するのか、そこには『沈黙する神』の答えを求めて苦しむひとりの信仰者の姿があつた。

『涙とともに種まく人は、喜びのうちに刈り取る。種入れをかけて、泣きながら出て行く人は、束をたずさえ、喜びながら帰ってくる。』 詩篇 126 篇 5 節

詩篇の言葉に生かされて、迫害の恐怖と戦慄を克服して、神に信頼し全てを神に委ねて雄々しく立ち上がり、迫害下に怯えながらも神を信じている長門・周防のキリシタン達を慰めるために、伊東マンショ神父は殉教を覚悟して宣教の旅に出ていった。

萩と山口への伝道と信徒組織の構築

毛利の城下町・萩には迫害に曝されている信徒達が 300 人いた。伊東マンショ神父は、萩（及び山口）の信者達が一層助け合うことができるようにキリシタン信徒組織（コンフラリア）を各地に創設した。禁教下、巡察師ヴァリニアーノの教えた信徒結束を図るための組織（コンフラリア）を作り、迫害に備える教えを見事に実行している。

イエズス会『1611 年度日本年報』には

『小倉のレジデンシアからひとりの神父【伊東マンショ】は長門・周防両国へ巡回を行ってそこに散在している信者達を訪れた。彼はその巡回にあたってかなりの成果を納め、聖体を受けられる人々に、告解、聖体両秘蹟を授けたが、それも、或る人々には初めてであつた。教理の説教を聴いた 70 人の成人に洗礼を授け、また信者達が相互いをいっそうよく助け合うために、或る所でサンタ・マリアのコンフラリア（信徒組織）を設立した。

彼が訪れた場所の中に毛利の城下町（萩）もあった。そこには 300 人の信者がいたが、しかし目下、そこに必要であるから、できるだけすべてを密かにした。昨年そこに行ったのは修道士【アンデレ齊藤】だけであったので、このたび神父【伊東マンショ神父】がそこに行ったのは初めてのことであった。そこで彼らは神父の訪問で大きな慰めを得、勇気づけられ、今後もそこを訪ねられるように門戸が開かれた。

神父【伊東マンショ神父】はまた、よく信仰を続けてきた山口の古い信者をも訪れたが、彼らからもたいへん歓迎され、もてなしを受けた。その町の奉行は異教徒でありながらキリシタン達に反感を示さず、かえって好意を寄せているので、神父は何の妨げもなく、そこでまったく自由に聖務を遂行することができた。そして神父は彼を訪問して、彼自身もまた神父を訪れて神父に対して数々の世辞を言い、最も丁寧な言葉と友情の印を表していた。そして神父の出発にあたっては、彼は街外れまで見送り、別れのときに、神父がキリシタンを訪問するため山口へ来る場合、いつでもまったく自由に、また公にそれをしてよい、また何の心配もなく何日でもそこに滞在してもかまわない、そしてもしも毛利がそのために怒るならば、自分がその責任をとると言った。このようなわけで、これからはいつも自由に、かの地のキリシタンを訪問することができるから、彼らも、神父自身も非常に勇気づけられた。』

（ロドリゲス・ジラン神父、1612年3月10日付け・長崎）

山口では、キリシタンに対して理解ある徳の高い奉行が宣教の許可を与えてくれ、伊東マンショ神父は自由に信徒達を訪問して慰め、告解を聴き秘蹟を授けている。萩での命を懸けて行った秘密裏の宣教とは違い、山口での働きは伊東マンショ神父の心に大きな喜びと慰めを与えた。ここでも将来の迫害に備えて信徒組織（コンフラリア）を組織している。

【セスペデス神父の突然の死去】

1611年（慶長16年）12月、セスペデス神父の脳卒中による突然の死去により、細川忠興は教会の破壊を命じ、伊東マンショ、カミロ・コンスタンチオ神父の退去を命じた。

『最後にグレゴリオ・デ・セスペデス神父、彼はスペイン人でマドリッドの生まれ。三請願の司祭で60歳に近く、イエズス会に入ってから42年、日本在留34年であった。

この神父、すなわちグレゴリオは、主に豊前で働き、その教会はからの建てたものであった。彼は長崎からその伝道所に帰るや、卒中により死んだ。彼の死で、同国の大名越中（細川忠興）殿を立ち返らせようという希望は潰れてしまった。』

* 『日本切支丹宗門史』 上巻 254頁 レオン・パジェス著

『すでに述べたように、グレゴリオ神父が暴君（細川忠興）の衝動を抑えている唯一の者であった。暴君は、その死を待って我らに対する攻撃を実施すべく命令を下した。セスペ

デス神父の死後二日目に、我が国においては教会も司祭も必要ないことを知らしめ、追放するゆえ、中津か、必要なことがいっそう好意をもって得られる他の地へ去るように命じた。』

『セスペデス神父の死去に伴い、殿（細川忠興）の命令で小倉のレジデンシアが破壊され、伊東マンショ神父と日本人イルマン（斉藤アンデレ）一人が同宿とともにレジデンシアを去った。』

* ヴァレンティン・カルプアリョ神父報告 1612年10月26日付け
『16・17世紀イエズス会日本報告書』 第二期 第一巻 239頁

細川忠興の神父追放令

細川忠興はセスペデス神父の遺骸の小倉での埋葬さえ許さずに長崎に送るように指示、セスペデス神父の死後2日後に、残りの神父（伊東マンショとカミロ・コンスタンチオ）とキリシタン指導者達に対して追放命令を出している。セスペデス神父の死を境にして、細川忠興はキリスト教との訣別を公にして、小倉の教会、修道院を破壊、後任の責任者である伊東マンショ神父を追放した。

『亡命する前に、神父達は賢明にも、信者を幾組織かに分け、各組織（コンフラリア）には特に選抜された一人にキリシタンがついていて、その世話をすることにしてあった。彼等は、この選抜されたキリシタンに臨時の洗礼の仕方や、瀕死の人の補佐をしたり、葬式の仕方に関する知識を授け、更に皆に対しては、最も年を重ね最も経験を積んだキリシタンの中から、補佐者を選んで付けておいた。牧者がないために、こうして彼等は出来る限りの補佐をした。』

* 『日本切支丹宗門史』 上巻 264頁 レオン・パジェス著

伊東マンショ神父とカミロ神父が最後に共に働いたのが小倉に於ける信徒組織（コンフラリア）の構築だった。

小倉・中津での信徒組織の再構築

信徒組織（*Confraria de Misericordia*・慈悲の信心会）とは、信仰共同体における兄弟会を意味している。信仰を生活の基盤として持ち、相互扶助、すなわち互いに助け合い励ましあいながら自分と相手の人格とを高めあうことを目的とした信徒達の共同体として発展していった。キリストにある平等という信念に基づき、地位、階級、貧富などの差別を克服して、相互扶助を実践していった。貧しい人々、虐げられた人々（被差別部落・穢多、非人）、見捨てられた病人（ハンセン病・癩病等）、流浪の乞食等に手を差し伸べていった。これらの人々に対してまず自分達が『共生』を実践して見せ、賛同を得た回りの人々と共に働き、社会事業として定着させ、結果的には布教活動に結び付けていった。

初めは宣教師の指導の下に自助信徒組織としてのミゼリコルデア・慈悲の組と、コンフラ

リア・信心会として組織化した。信徒代表がこれを指導して宣教師の下、活動を展開していた。信徒代表は、組親とか組頭と呼ばれていた。信徒組織は定期的に集会を持ち『心業修行』『キリストにならいて』（コンテムツスムンジ）『ドチリイナ・キリシタン』『ぎやどぺかどる』『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』『スピリッアル修業』等、などの霊的書物を信徒代表が信徒達に読み聞かせて信仰の強化を図っていた。死者の埋葬・教会の管理維持・病人や貧しい人々の世話などの慈善活動を率先して行った。

小倉と中津の信徒組織・コンフラリアは1600年、中津でセスペデス神父が働き始めたときには既に信徒の間で組織構築され存在していて、1603年、中津から小倉に移ったときも、小倉教会の中に存在していた。信徒達の貧しい人々への施し、ハンセン病（癩病）患者への救済、教会の中に設けられていた孤児院での働きなどが、イエズス会の報告書に述べられている。1611年12月、セスペデス神父の突然の死去後、細川忠興の追放命令により小倉と中津から撤退を余技なくされた伊東マンショ神父とカミロ・コンスタンチオ神父が、小倉と中津を撤退するときに構築した信徒組織・コンフラリアとは、既に存在していた信徒組織を再組分けして、各組織に代表者を任命して迫害下に於いて潜伏活動するための準備を整えたと考えられる。各組織の代表者に臨時の洗礼の仕方や、瀕死の人の補佐をすること、葬式の仕方に関する知識を授け、更に最も年を重ね経験を積んだキリシタンを選んで代表者の補佐役とした。この時任命された指導者達の名前を、6年後の1617年（元和3）8月に作成されたコーロス徴集文書の中に見ることが出来る。

コーロス徴収文書に記載された小倉・中津の信徒代表者達

*コーロス徴収文書とは1617年（元和3）8月24日、豊前の国小倉、8月25日中津、両町のキリシタン代表者達がイエズス会日本管区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、小倉31名、中津17名の指導者の名前が記録されている。

コーロス徴収文書は日本在住の托鉢修道会から、イエズス会の指導司祭たちは迫害の下、日本人信徒を見捨てて信徒達に躓きを与えているとの非難に答えるために、全国各地の信徒代表者から証言を集めることにした。この文書は日本語に訳文を添えてヨーロッパに送られた。私達はこのコーロス徴収文書により、1617年（元和3）の日本に於ける各地の755名の信徒代表者の名前を正確に知ることができる。この最高機密書類はプロクラドルといわれた日本イエズス会の代表者がヨーロッパまで肌身離さず携帯して行った。文書収集の過程は秘密裏に行われたが、この様な指導者達の署名徴収は日本では初めてのことであり、潜伏していると言ってもキリシタン界での公けの大きな動きは小さな漣（さざなみ）を表面に立ててしまう。文書収集の過程で機密が官憲に漏れた地方の徴収文書もあったと推察される。秘密裏に作成された文書から機密が漏れ壊滅的弾圧迫害を受けた地方があることを、その後の殉教の事実と歴史が物語っている。小倉中津の豊前地方に於ける弾圧迫

害の過程を見ると、細川忠興側に秘密が漏れた徴収文書の写しがあるように推測される。あるいは拷問により棄教させられた信徒が徴収文書のことを白状したのかもしれない。なぜなら、コーロス徴収文書が書かれた次の年、1618年2月末から8月初めにかけて62名という多くのキリシタン達がコーロス徴収文書に記帳した指導者達と共に殉教している事実がそれを物語っている。

* 『近世初期日本関係南蛮史料の研究』 松田毅一 風間書房 1967
第六章 元和3年、イエズス会士コーロス徴収文書 1022~1145頁

小倉のキリシタン代表者の名簿 31名 1048~1050頁

御出世以来千六百十七年（1617年）元和参年八月廿四日

松野はんた理庵、松野ふらん志すこ、小笠原寿庵、結城志ゆすと、中村志ゆすと、加賀山了五、山田寿庵、清田志門、大串寿庵、大西了五、田中（安）あてれ、関備世天、菅原ちにな、大野満所、宮崎寿理庵、鷹巣ろまん、大串志もん、角野ミける、木付はうろ、吉良志もん、佐田とめい、甲斐志よらん、糸永理庵、了意志もん、田代理庵、田吹（安）あてれ、薬師寺志めあん、米や寿庵、ぬしや寿庵、ときやへいとろ、をひや寿庵。

中津のキリシタン代表者の名簿 17名 1051~1052頁

御出世以来千六百十七年（1617年）元和参年八月十五日

久芳寿庵、榎橋理庵、川井寿庵、小嶋パウロ、志賀ビセンテ、内田寿庵、矢田ジャコウベ、内山トウマ、田房ベント、内田シモン、久恒寿庵、同シモン、蠣瀬自庵、推田ペイトロ、御手洗ゑすてはん、今永トメイ、魚住たい里やう。

【小倉追放後の2人の神父の歩み】

1611年（慶長16）12月、セスペデス神父の突然の脳卒中での死により、細川忠興の暴挙を止めるものが何もなくなってしまった。細川忠興はセスペデス神父の遺骸の埋葬さえ許さずに長崎に送るように指示、セスペデス神父の死後2日後に残りの神父とキリシタン指導者達に対して追放命令を出している。セスペデス神父の死を境に、細川忠興はキリスト教との訣別を公にして、小倉の教会を破壊、後任の責任者である伊東マンショ神父を追放した。

伊東マンショ神父は、加賀山隼人・清田朴斎の忠告により、忠興の息子・細川忠利を頼り、中津に避難、そこでクリスマスミサ（降誕祭）を盛大に行っている。その後、中津に於いても残されるキリシタン達がこれから起こる迫害に耐えられるように、また互いの信仰を良く助け合うために、幾つかのキリシタン信徒組織・コンフラリアを編成した。

カミロ・コンスタンチオ神父はしばらくの間、長門の国・下関に留まり、小倉の動向を見ながら、小倉の信徒達を励ましていたが、堺に行くように遣わされて移動した。

小倉教会の壊滅の後、残された信徒による組織・コンフラリア構築が終わった後、伊東マンショ神父とカミロ・コンスタンチオ神父は別れ、【この別れが2人のこの世での最後の別れとなった】伊東マンショは忠興の嫡子忠利を頼って中津に行き、盛大にクリスマス（降誕祭）を祝っている。その後中津に於いても信徒組織を構築して1612年（慶長17年）になって長崎に戻り、11月13日に、肋膜炎【胸膜炎】のため長崎のコレジオで死去した。（43歳）

丈夫でなかった伊東マンショ神父の健康は、前年の仕事（長門・周防・飢肥の旅）や、迫害の勃発、命を懸けて築いてきた小倉教会の破壊と消滅という試練に耐えられなかった。体に違和感を覚え、長崎のコレジオ（現・長崎県庁、または春徳寺）に戻り、父のようなディオゴ・デ・メスキータ神父と、盟友・原マルチノ神父に見守られながら、1612年（慶長17年）11月13日に死去（43歳）した。おそらく臨終の前には、同じ盟友である中浦ジュリアン神父も筑前博多、または筑後秋月（甘木・今村）から駆けつけたと考えられる。

伊東マンショ神父の死去

丈夫でなかった伊東マンショ神父の健康は、前年の仕事（長門・周防・飢肥の旅）や、迫害の勃発、命を懸けて築いてきた小倉教会の破壊と消滅という試練に耐えられなかった。体に違和感を覚え、長崎のコレジオ（現・長崎県庁）に戻り、父のようなディオゴ・デ・メスキータ神父と、盟友・原マルチノ神父に見守られながら、1612年（慶長17）11月13日に死去（43歳）した。おそらく臨終前には、同じ盟友である中浦ジュリアン神父も赴任地である筑前博多、または筑後秋月（甘木・今村）のレジデンシアから駆けつけたと考えられる。

* 『秋月のキリシタン』 H,チースリク著 110~114頁。参照

イエズス会『1612年度日本年報』に伊東マンショ神父の死亡が簡素に報告されている。

『今年死亡した会員の2番目は、伊東マンショ神父であった。日向の国の出身で、43歳。彼は1584年にローマへ行った四人の正使であって、帰国してから世間のすべてのことを捨てて、1591年に我が会に入った。会で過ごした21年の間、彼はその修道者としての忠実と靈魂の救いに対する熱意によって、皆に感化を与えた。』

* マテウス・デ・コーロス神父報告 1613年1月12日付け

Matheus de Couros S.J. Jap Sin. 57, f. 192:

『16・17世紀イエズス会日本報告集』 第二期 第一巻 283頁

伊東マンショ神父の死亡原因の病気について、臨終に立ち会ったメスキータ神父の一年後のイエズス会最高責任者・アクアヴィヴァ総長宛の1613年11月9日の手紙には、はっきりと『肋膜炎のようでした。』と述べている。

『ここにいる日本人の神父達について総長様には次の事を申し上げることが出来ます。彼

らは今までよくやりましたし、それは私達が期待していた以上です。伊東マンショ神父は既にこのコレジヨで皆に立派な模範を示し、安らかに自分の道を終えました。病気は肋膜炎のようでした。神の奉仕と靈魂の救いのためによく働きました。』

* ディオゴ・メスキータの日記 1613年11月9日付 Jap Sin 36. 27~28v
『天正少年使節・史料と研究』 168頁 結城了悟著
純心女子短期大学・長崎地方文化研究所

肋膜炎【胸膜炎】について

胸膜炎とは、肺の外部を覆う胸膜（壁側胸膜＝肋膜・肺胸膜）に炎症が起こる疾患であり、かつては肋膜炎と称されていた。それ自体で発症することは少なく、ほとんどは癌や結核、肺炎などの後に発症することが多い。

原因による分類

1、癌性胸膜炎

肺癌をはじめとするほかの部位にできた癌の肺への転移などによるもの。悪性腫瘍が直接胸膜に浸透したり、胸膜への転移が起こると胸水が溜まる。原因としては肺癌が最も多く、そのほか、いろいろな部位の癌（胃癌、頭頸部癌、悪性リンパ腫、乳癌、卵巣癌）でおこる。まれに、胸膜から発生する悪性中皮腫が原因となることがある。

2、結核性胸膜炎（結核菌による胸膜炎）

肺結核をはじめとして結核菌によるもの。結核菌の感染によって起こる胸膜炎で、一般には肺内に結核病巣があり、それが胸膜に波及して発症する。胸膜炎の中で癌性胸膜炎とともに多く発症する。

3、肺炎随判性胸膜炎・その他の疾患による胸膜炎

細菌性肺炎や肺化膿症、気管支拡張症など、肺に細菌が感染したことに伴い、胸水が貯まる状態。胸膜への細菌感染を伴い膿が出る膿胸と、伴わない場合がある。

4、膠原病に伴う胸膜炎

慢性関節リュウマチ、全身性エリテマトーデスの経過中にもしばしば胸に水が溜まることがある。

5、心臓疾患や肺疾患、腎臓疾患、等に伴うもの。

心不全、肺梗塞、ウイルス感染、消化器疾患、腎臓疾患が胸膜炎の原因になることもある。

症状

- 1、胸の痛み（胸水が溜まることによる痛み）
- 2、呼吸困難（胸水が溜まることによる呼吸困難）
- 3、発熱、咳、痰、血痰、等

漿液性渗出性胸膜炎

胸膜に炎症が起こると、多くの場合、胸膜腔内に液体が溜まる。これを漿液性渗出性胸膜炎という。胸膜に溜まる液の量は原因にもより違うが、一般的に胸膜の冒され方が強く、その範囲が広いほど多量の液が溜まる。結核の初期に起こる胸膜炎、結核以外の細菌による軽い胸膜炎やウイルス性の胸膜炎等では、麦わら色の比較的透明な液が溜まるが、炎症が強い場合には、血液の混じった茶色の液が溜まる。

膿胸性胸膜炎

結核以外の細菌による肺炎や肺化膿症に胸膜炎が併発した場合、あるいは、結核性であっても、肺結核の空洞（内容は多数の結核菌や膿）が胸膜腔に破れたり、結核菌に加えて他の細菌が混合感染を起こした場合は、胸膜腔に溜まった液体は、多数の白血球のために膿となる。これを膿胸という。膿胸は、主として細菌により引き起こされた化膿性胸膜炎であり、ただ漿液性渗出性胸膜炎と異なるところは、細菌が胸膜腔へ達する道筋が肺や肺門リンパ節からだけでなく、肺を取り巻いているいろいろな部分から入って、胸膜腔を汚染するが多い。

以上、メスキータ神父により報告されている、伊東マンショの死亡原因と記述されている肋膜炎・胸膜炎について述べたが、胸膜炎との因果関係が、癌性の胸膜炎なのか、結核性の胸膜炎なのか、肺炎からの胸膜炎なのかの結論には至っていない。

伊東マンショの死に際がどうであったか、どの様に死んで逝ったかまでは、断定できなかった。しかし胸膜炎での死に際は、発熱の中、呼吸困難を伴い、血液混じりの茶色の液を吐きながら、徐々に弱まって死亡した。と、おおよそ想像できるのではないかと思う。

【コンスタンチノ神父の堺での活動と日本退去】

カミロ・コンスタンチオ神父はしばらくの間下関に留まり、小倉の動向を見ながら小倉の信徒達を励ましていたが、堺に行くように遣わされて移動した。堺に移動してその年の暮れにカミロ神父は伊東マンショ神父の訃報を堺で受け取っている。小倉に於いて1年前までともに働いていた伊東マンショを兄と想い、1番の親友であり、誰よりも共に歩んだ伊東マンショがこんなに早く亡くなるとは心から嘆き悲しんだであろうことは容易に理解できる。カミロ・コンスタンチオ神父の足跡を辿るとそこには必ず伊東マンショの姿がある。カミロ神父の1番の日本人の親友は伊東マンショだった。マカオで初めて出会った日本人

は伊東マンショと中浦ジュリアンであり、日本に来て有馬のセミナリオで日本語の勉強を助けてくれたのも伊東マンショであり、初めての任命地である小倉で共に働いたのも伊東マンショ神父だった。

小倉から退去した 1611 年 12 月からキリシタン追放令が出る 1614 年（慶長 19 年）まで堺の信徒達の世話をしながら布教活動に従事した。堺には教会がなく、カミロ神父は指導して教会建築のために広くて便利な土地を購入することに成功した。教会建築の準備に入ったとき迫害が起こり、1614 年 3 月、カミロ神父はキリシタン追放令に従い集合場所である長崎に退去した。

1614 年 11 月 8 日、長崎からマカオに追放された。

【マカオでの日本仏教の研究】

マカオに追放されているときも、熱心な修道者としてイエズス会の規則を厳守していた。誠実な神父で全ての行動に平和がみなぎっていた。マカオに於いて日本仏教についての本を書いている。日本仏教についての本を出筆したのも日本に対する愛情を捨て切れなかったからだし、マカオに於いてコンスタンチオ神父はどんなにか日本を、また伊東マンショ神父との数々の出会いと築いてきた友情とを懐かしんだことであろう。想いだせば想いだすほど、日本に対しての郷愁の念に駆られた。志半ばで病のためになくなった伊東マンショ神父の意志をどうしても引き継ぎたいと幾度神に願ったことであろうか。神はカミロ神父の願いを 7 年目に受け入れてくださった。

【日本への再潜入】

1621 年（元和 7 年）日本人のジャンク船（和船）が東南アジアから帰るときに、商品を買って求めてマカオに着いた。この船を利用してすでに東南アジアから商人に変装して乗船していた 1 人の神父がいたので、イエズス会の上司達はカミロ・コンスタンチオ神父に日本に帰りたいのかと尋ねた。カミロ神父は背が高く太っていたので日本へ帰ることは不可能だとあきらめていたので喜んでその申し出を請け可能な限り準備して世俗の人として船に乗り長崎に向かった。船の中の 2 人の神父達の行動が世俗の人でないと見られていたので、船長は長崎に入港して直に 2 人の外出を許さず、船の役人に預けた。翌日船長が 2 人の神父を立山奉行所に連れて行く前に、数人の信徒達の耳にその噂が入り、信徒達は船長と交渉して、船長の良心と名誉だけでなく、金を与えて船長を満足させた。2 人の神父は直ちに長崎の町を離れた。長崎の町を離れるときにガスパル籠手田の両親が息子ガスパル（20 歳）をカミロ神父の同宿として使ってくれるように同伴を申し出た。数日間の休息の後、菅区長はカミロ・コンスタンチオ神父とガスパル籠手田を不動山レジデンシア（現・嬉野町不動山地区）の跡地に送った。ここの殿は古くからの信者で、そこには危険がなく誰も彼の家

【佐賀・嬉野郊外の不動山レジデンス】

イエズス会 1612 年度日本年報には不動山の司祭館について

『この司祭館（不動山レジデンシア）は肥前の国、大村領に近い國堺にあり、寺沢（志摩守）が居住する唐津に近い。そこには、司祭 2 名と修道士 1 名が住んでおり、非常な労苦をし、3 人の貴人のもとで、はなはだ遠方まで赴いては（キリシタンの心を）耕し、また大いに注意を払って行っていた。しかしまた、大村のキリシタンからは多くの果実を収穫している。』と報告している。

しばらくして 1621 年（元和 7 年）そこの殿の知行が別な所と交換されたので、カミロ神父は拠りどころを失って唐津に移動した。

この時の移動の経路は、おそらく、ニコラオ福永ケイアン【慶安または慶庵？】修道士が 1632 年（寛永 9 年）6 月早朝、唐津浜崎道で捕縛された時、白状した調書に書いてある道が、その道はキリシタンが使っていた裏の抜け道だったと推測される。

『不動山より武雄の内、犬走と云所ニ参り一宿いたし、翌日夜道二武雄所々の番所を忍通り、浜崎へ罷り越候』（九州史料落穂集第五冊「水江臣記」南里三良左衛門由緒）より

地元不動山のキリシタンが道案内をして、カミロ・コンスタンチオ神父、ガスパル籠手田、唐津から迎えに来たキリシタンの 4 人で、夜の闇に紛（まぎ）れて危険を伴う番所抜けをしたことがこの記録から推測できる。

【唐津のキリシタン】

唐津の信徒（おそらくリアン少斎）がカミロ神父を匿（かくま）った。カミロ神父は唐津にゆっくり滞在して、唐津の信徒は少数だったが信徒組織（コンフラリア）を構築できた。

唐津の信徒と教会について『イエズス会 1612 年度日本年報』には

『或る司祭が（寺沢）志摩（守）殿が主城を築いている唐津に伝道に赴いた。その折に、少し前に受洗したばかりの大勢のキリシタンの（信仰を）確かなものにした。それは少し後になって、次の迫害の際、確固たる信仰を示すこととなった。彼らはまたリアン少斎という身分の高いひとによってもそうするよう援助を受けた。彼は激しい迫害の中にあっても、すべての者に対し父として振舞い、温かく見守り慰めた。密かに自宅を教会とし、十字架と聖像を飾った祭壇で礼拝し、祝日にはキリシタンたちが祈りを捧げに来ている。また異教徒たちにも聖なる信仰を授かるよう説き、自らの聖らかな生活で一同を感化している。

迫害の炎が全国をうねりながら広まっていくのを知ると、リアン（少斎）はキリシタン全員を呼び、生ずべき事態に備えるよう告げると彼らはそのようにした。唐津の支配者達は、

駿河でなされていることがしたためられた書状を受け取ると、すぐ信仰を棄てようとしな
いキリシタンは追放に処すとの布令を出した。禁令が発布されると、皆リアン（少齋）の
家に集まりリアンは貧しい者には喜捨を与えて援助し、或るものは長崎へ、或るものは博
多へと送り出した。また寺沢（志摩守）からキリシタンとして自由に生きてよいという許
可を得ていたにもかかわらず危険を感じ、以前のように司祭を呼べないのを知ると、扶持
を捨て自らの救いを迎えようと安全に静かに遁世させてくれるよう強く求めた。

かつて（高山）ジェスト右近殿の家臣であった者が寺沢（志摩守）に仕えていたが、迫害
を見て、良きキリシタンとして生きることができないのを悟ると、殿から受けていた 600
石の扶持を放棄して、妻や息子たちと長崎に退き、自ら選んだ貧困の中で豊かに暮らした。
唐津の殿のその同じ城に、様々な理由で隠していたが、これもキリシタンの武士の妻であ
るモニカという名の高貴な奥方が住んでいた。モニカはキリシタンの信仰と習慣を守り、
司祭が来た折には、家人全員に告白させ、異教徒で新たに下僕になった者にはキリシタン
になるよう説得する方であった。迫害時にはキリシタンであることが露見しても、信仰を
棄てるよりは追放や家財没収の憂き目も喜んで受け入れると約束して、夫や家人を勇気づ
けた。』

『寺沢（志摩守）の一族の数名のキリシタン婦人は信仰を棄てるよう非常に厳しく迫られ
ていた。しかし非常に大胆に振舞ったので、迫害者達は彼女らをそのまま生かしておかな
ければならなかった。その信仰の強さはデウスのもとにいるに値するばかりか、一同の称
賛を浴び、異教徒の奥方からも、時折キリシタンの家に祈りに行ってもよいという許可を
得、救世主の聖像の前でこの上ない満足を得た。』

【コンスタンチオ神父、平戸へ移動する】

平戸までカミロ神父の噂は聞こえていたので、リアンをいう信者が唐津までカミロ神父を
迎えに来た。平戸の信徒達は既に数年前から留まって宣教してくれる神父を探していた。

【平戸での宣教と逮捕、キリシタンの協力者たちの殉教】

『管区長の神父からカミロ・コスタンツォ神父は、この悩める教会に全身を捧げてきた。
「彼は、キリシタンと聖なる結婚をした」と言われた。平戸の町にも、多数の囚徒がおり、
その中には、フロレス師の宿主エルナンド・シメネスというイスパニア人と、その日本人
の妻、並に下婢がいた。カミロ師は、彼等の隠れ家に入り、その告白を聴き、殉教の準備
をしてやった。神父は、首都（平戸）に於ける聖務を果たしてから、45 リュー離れた付近
を訪問した。彼は又、生月島中の館ノ濱で、豊かな精神的の果実を採取した。

修道者は、生月島から約 10 リューの所に位する納島という小さな島を訪ねたいと思って、
彼の宿主で伝道師のヨハネ・ザエモン（左衛門）と共に海に乗出した。同船には、イエズ
ス会の修士ニコラス、伝道士ガスバル・コテダ（籠手田）、平戸の教会の看房アウグスチノ・
オオタ（太田）、それに従僕 1 人とキリシタンなる水夫 2 人がいた。彼は、納島に 3 日間滞

在し、半リュー離れた五島の主島なる宇久島に渡った。

或るキリシタン婦人は、異教徒である夫を改宗させようとして、神父の見えていることを夫に話した。この人は、それを五島殿の許に訴え出た。領主によって遣わされた捕吏は、神父ただ一人だけを見出した。修士は不在であった。然し、彼等は、神父と一緒にいた者、或は彼の手伝いをしていた者を全部を召捕った。

納島で、アウグスチノ・太田とガスパル・籠手田が捕はれた。彼等が見つかると同時に、報酬、即ち殉教に価する聖なる事業に協力していた人々、その全部が捕はれた。

カミロ師は、捕卒に両手を差し出した。然し、この尊い人を見ると、捕卒たちは、敢えて無理なことはせず、日本の習慣に従い、禮（れい）を厚くして神父を招いたが、神父はそれを拒絶した。

神父とその伴侶とは、フロレスとズガニの両神父が船長平山（常陳）と共に監禁されていた壱岐の島に連行された。その後間もなく、難教者全部が平戸に連行された。生月で、役人たちは、計画を変更し、そこに他の者を残して、ただカミロ神父とアウグスチノ太田、及びガスパルだけを平戸に連行した。然し、ガスパルは、公儀の牢舎に監禁された。

この時、平戸の領主は、若干の犠牲者を出した。宇久（うき）を去るに当たり、神父はヨハネ・左衛門に縋る彼の協力を感謝し、イエズス・キリストの御心によって、聖愛にあやかるといって彼を励ましていた。左衛門は、誠を示し、彼の伴侶の頭分は、殉教の勝利を得た。33日間もいた館ノ濱の狭い牢舎で、彼は、度々老母の訪問を受け、なお慰めの言葉を受けた。然し、彼は妻と幼い子供の顔を見ると、妻にひしひしせまる愛情のため、天主に至高善、並に近い報酬を受けるのを妨げられたくないから、再び来てくれないように頼んだ。

5月27日、カミロ神父の宿主ヨハネ・坂本左衛門（31歳）と、小船の寄附者ダミアン・イスライ・出口（42歳）は斬首にあった。ヨハネは、口のきけないように、紐でひどく首を絞められたのであった。彼等は、小さな中江ノ島に連行された。船中で、ダミアンは櫂をとり、讚美歌を歌いながら、漕手を手伝った。刑場でも、ヨハネ左衛門の頭上に、偶像教の書付けが細紐で結ばれた。彼は之を取去ることができなかったが、出来る限り、キリシタンであると叫んでいた。ヨハネは、真先に斬首された。ダミアンは頭を上げ、また下げた。次いで彼は『至聖なる聖体よ。褒め讃えられ給え！』といった。そこで、彼は首を創手の前に延した。（註・彼等の遺骸は袋に詰められ、海に投棄された）

6月2日、平戸から独立している壱岐の島で、85歳の老人で、平戸のイエズス会の天主堂の堂守であるパウロ・毛利孫左衛門は、足を縛られ、袋に詰め込まれ、頭には別の袋を冠せられたうえ、足で踏みつけられたが、これはイエズス・キリストの葡萄園の収穫に価した。而して最後に、彼は、2つの大きな石を結わえられ、生きながら海中に葬られた。

(註・彼の殉教後 1 時間、船に乗ったキリシタンたちが、波をけつてくると、パウロの頭と体の 1 部が、海面に浮かんだ。而（しかも）も、『イエズス・マリア』の聖名を判然唱えるのが聞きとられた。なお石が識別された。然し、再び沈んだ体は得られなかった。)

6 月 3 日、同じ島で、船頭のヨアキム・川窪庫兵衛が斬首された。彼は初め、境目から 1 リュー離れた山田の城中に遠ざけられ。そこで餓死するのを待っていた。

彼の妻のマグダレナは、素裸にして曝すと脅されたが、この苦しい侮辱は免れた。

(註・ヨアキムは、しっかり縛られながら、嬉しさに身を顫はせて歌っていた。彼の歌った文句はかくの如くである。『若し、私が十字架に凭れて天国に昇らなかつたら、罪の重さのために私は天国の追放者になったであろう。』彼は死に臨んでロザリオの玄義に関するところを唱えた。』彼の遺骸は海中に投棄された。)

6 月 8 日、ヨハネ・次郎右衛門 (47 歳) は、棄教の印に偶像教の飲料たる符を呑むことを拒み、死刑宣告を受けた。彼は長い鞭打ちの苦行を行って、覚悟を固めた。彼は乗船して中江ノ島に向かい、島に近づきつつ『ここから天国は、もう遠くない。』といった。

(註・彼は生月の人で 47 歳。彼の遺骸は海に投棄された。)

7 月 22 日、コンスタンチオ神父の宿主で 70 歳のアンデレア・ヤブ納島が、多分壱岐の島で斬首された。

宣教師たちの宿主をし、最後にはコンスタンチノ師の伝道士であり、聖ロザリオ会の会頭であったガブリエリ・一ノ瀬金四郎 (平戸生まれ・23 歳) は、その住家で召し捕られていたのもであった。彼は、キリシタンたちの信仰が動揺しているのを知り、番人から、毎日夕方帰ってくる約束で、昼だけ外出の許可を得た。かくして、彼は、兄弟を慰問し、信仰を固める機会を得た。7 月 26 日、彼は死刑の宣告を受けた。船で生月に連行される途中、彼は休まず説教を続け、最後の次の言葉でくくった。『キリシタンの教えは、時が来れば、再び頭を上げて、日本中に広まるであろう。』これを聞いた異教徒たちは、彼の雄弁に感じて、キリシタン尉なる約束をした。からは、死ぬべく跪いて、ロザリオの玄義を黙想していた。

(註・彼の遺骸は海中に投棄された。)

同じ日、生月で船頭のヨハネ・雪ノ浦左衛門 (25 歳) とパウロ・塚本 (35 歳) が斬首された。(註・彼等の遺骸は海中に投棄された。)

最後に 8 月 10 日、コンスタンチオ神父の伝道士アウグスチノ・太田が剣で殺され、イエズス会の修士として死んだ。一緒に牢舎にいたカミロ師は彼のために、長崎の駐在所長 デ・バエサ師にこの恩恵を請わせた。アウグスチノ・太田が殉教する筈の丁度前日、返事が届いた。アウグスチノ・太田は誓願を立て、そして昔の修道者たちに則つて、真先に牢の見

える壱岐の島の海岸で殺された。その牢から 3 人の修道者が彼を認めることができた。
(註・彼の遺骸は海中に投棄された。)

『日本切支丹宗門史、中巻』 206～209 頁、第 7 章、1622 年、レオン・パジェス著

【コンスタンチノ神父の伝道士*ガスパル・籠手田の殉教】

『長崎では、大殉教（元和の大殉教、西坂において 55 名処刑、1622 年 8 月 5 日）の翌日（8 月 6 日）、他に剣による処刑があった。コンスタンチノ神父の伝道士*ガスパル・籠手田（21 歳）はコスメ・竹屋（1619 年殉教）とイネス（前日斬首された）の子で、ようやく 12 歳になったかならぬ*フランシスコとバルトロメオ・七右衛門（前日斬首された）の子で 7 歳の*ペトロと共に、刑場に連れて行かれた。

(註・ガスパル・籠手田 21 歳、コンスタンチノ神父の伝道士。彼は又、ドミニコ会の神父の伝道士でもあった。彼は聖ドミニコ会の第 3 会員であった。)

(註・フランシスコ 12 歳、この子は、父の死後、平戸に連れて行かれてキリシタンの武士の養子となっていた。しかし、將軍の新しい命令は、昔の殉教者の息子にも及んで、フランシスコは、役人の前に呼び出された。役人は、この子供の情愛と智徳に感じ、彼を赦して自分になづけようとした。フランシスコはきかなかった。彼は、刑場で殉教者を尊敬して、首を剣の下に差し伸べて、殉教者と行いを共にした。)

(註・バルトロメオ・七右衛門の子、7 歳の*ペトロ。ペテロは混雑中に彼を忘れていた。キリシタンたちは彼を匿った。しかし間もなく役人は、このことを知らされて、キリシタンはこの子供を渡さなければならなかつた。まったく純潔、無邪気で、イエズス・キリストの恩寵によって信念堅く、信仰を棄てることを拒否した。これに対して、彼は前日の殉教者の幻影のよって天から激励を受けたと言われている。1 人の兵士は彼を胸に抱いていた。子供は扇を手にして、日本流に淑やかにお辞儀をした。聖山で彼は、切断されて蒼白になった遺骸の山の中を軽く横切り、犠牲の場所に行つて跪いた。)

『日本切支丹宗門史、中巻』 242 頁、第 7 章、1622 年、レオン・パジェス著

第 6 章

カミロ神父の同宿であったガスパル籠手田とイルマン・アゴスティーニョ太田の生涯と殉教
『今年（1622 年）、修道者の中で最初に殉教したのはアゴスティーニョ（太田）であった。替えが平戸で殺されたのでその殉教は別の場所で行われ、そしてコンスタンソ・カミロとかかわりがあって、もっと理解するために長崎の殉教（元和 6 年、1622 年 8 月 5 日、西坂

においての 55 名の殉教) の後に書く方が良いと思われる。アゴスティーニョは五島列島出身で、その列島は、この町（長崎）の西南西 40 里ほど離れたところにある。ここから中国の海岸まで往復する船は、その島々のそばを通過して行く。13 歳の時に受洗し、自分の島に教会があったときにその看坊になった。看坊といえば、神父の留守の間、信者と教会の世話する人で、幼児に洗礼を受け、病人を見舞い、死者を埋葬したりする。自分の島の教会が破壊されると長崎に移住し、そこで妻が亡くなった。世俗の結びつきからもっと開放されて救いの道を歩み、ここから平戸に行って 3 日間信者を世話した。

幼児に洗礼を受け、信心の組を整備し、貧しい人々の父親のようであって、自分自身も貧しく、他の貧しい人々を助けるのを好み、彼らのために施しを集めて自分の貧しい物のうちからも施していた。初め看坊の務めを受けるとき村々を巡って宣教し、人々にキリスト信者になる方法を教えていた。時には信者を訪ねるように神父に頼みに来た。他人の幸せだけを求めていた徳ある人で、信者ではない人たちは彼がイエズス会のイルマンだと思っていた。平戸やその周辺の島々の信者たちは、数年来神父に会うことができなかったのに、霊魂の救いのことに対して不熱心になっていたが、アゴスティーニョは彼らを自分の世話のもとで非常に良い方法を用いたし、我が主がこのように手助けをしたので、彼の導きと勧めによって彼らはわれに返り、今は非常に完徳と救いの道に進んでいる。数年間、あの教会を訪れていた一人の神父の言葉によると、それはこの良いイルマンの宣教の結果である。霊魂の救いのことだけを考えていたので、今年カミロ神父が遣って来たときずっと彼と一緒に村から村へと巡礼と宣教に行き、皆の告白を聴き、神父に会わない人がないようにして、その困難な時にも誰でもその恵みを受けられるようにした。神父と離れることのない判であったので、一緒に五島のある島（宇久島）で捕らえられ、平戸に連行され、そこから壱岐の島に送られて、自分の苦勞の終わりまでそこにいた。

しかしアゴスティーニョは平戸に住んでいたため、問題はもっと早く解決された。またいつも立派な模範を示してイエズス会のイルマンとして死にたいという強い望みを持っていたので、管区長神父カミロ神父に自分の名前でイエズス会に彼を受け入れるようにという手紙を送った。その道は遠く、長崎から船をそこに出さないように命令があったので、牢屋に送られた手紙の大部分がカミロ神父の手に届かなかったが、イルマンとして受け入れるという許可が書いてある手紙を我が主が問題なく殉教の一日前にカミロ神父の手に届けた。したがってカミロ神父は彼を引き受け、アゴスティーニョは牢内の 3 人の誠実な修道者の前で修練者が時々する信心のための誓願を立てた。このような短い修練期でこの新しい修練者とイルマンは、誓願に立ち合った 3 人の誓願者と同じように幸せを感じていた。カミロ神父の 1 人の同宿はこの出来事の証人となった。彼は後で捕らえられてこの町（長崎）にやって来て、ここの牢屋で島に起こったことを証明した。私が日本語からポルトガル語に翻訳した文は次のようである。

『太田ファン・アゴスティーニョ、イエズス会のイルマン、我が主キリストの教えを宣教したので平戸の殿の命令に従って、日本の 7 番目の付きの 4 日、聖ロレンソの祝日（8 月

10日)に喜んで我が主キリストの愛のため命を捧げた。彼を殺した執行人は山口伝助という人で、遺体は海に沈められた。殉教の時間は日本の4時で、それは10時から11時の間で、殉教の証人はカミロ・コンスタンソ神父、聖アゴスティーニョのペトロ神父(ズーニガ)、聖ドミニコのルイス(フローレンス)神父であった。この最後の2人は長崎で火炙りの殉教を遂げた。そして私ガスパルはそこにおいて、同じところに居合わせたので、この事実について疑問が残らないようにここに署名する。

1622年7番目の月の16日(即ち8月22日)

この文章の末尾に自分の名前を入れた。信心深く幸せなアゴスティーニョの殉教の場所は修道者たちが留められている牢屋の前の浜で行われていることを牢屋から見る事ができた。この勝れた一流の証人の目前にこのような証人(ガスパル)は1人だけで十分であって、その証言に対して文句のつけようがない。我らの良きイルマンは栄光をもって生涯を終えた。牢屋から出る前に恐らく修練長は良き勧めをしたに違いないし、ゆっくり別れを告げたであろうが、それについては私たちは何も知ることが出来なかった。

証人たちはまもなくして自分たちの命をもって教えていたことを証明した。この異邦人の国でキリストの教えだけが救いへの道である。上記の証明書を書いたガスパル籠手田もしばらくして亡くなった。従ってもっと詳しくこの熱心なイルマンの死の出来事を城ことができなかつた。彼が今年の8月と9月の殉教者の最初であって、その殉教者の数が100人を超えている。

ガスパル籠手田はイルマン・アゴスティーニョの殉教について証明書を書いた。カミロ神父の同宿として長くは努めなかつたが、その短い間に他の人が長年望んでも得られない恵みを受けた。神父の同宿としてミサ答えをしたりして彼に従って住んでいる人よりも先に殉教の棕櫚の枝を受け、すべてがスペインの有名な聖人や聖なる教区の場合とまったく違っていた。我らの同宿は司祭よりも3日早く前に亡くなり、ここでは司祭は老齢でもっと勇敢な人物で、もっと長い戦いが彼を待っていた。ガスパル籠手田はこの長崎市に生まれ、出産前にその母親は、もし、生まれる子が男子であつたら教会に捧げる約束をした。イエズス会の教会で当時皆がしていたように洗礼を受け、母は彼が修道者になるという目的があつたので、小さい時から神にささげていると彼に言い聞かせていて、冗談でも世俗的な歌を歌うことを許さなかつた。性格は優しく両親によく従い、霊的な話を聞くのを好んでいた。9歳の時からサント・ドミンゴ教会に行つてそこで読み書きを習っていた。教会が破壊された時(1614年11月)はまだ少年で両親の家にはいたが、いつも善行に興味を持って霊的な読書と救いについて話がある所には自由に出かけていた。

この迫害時にしばらく殉教者のバスティアン神父に仕え、またカミロ神父が昨年日本に着いた時に同宿を持っていなかつたので、両親は彼をその務めに差し出すと彼は喜んで一緒に行つた。例えば、今年の初め頃、神父と平戸で一緒になり、島々での宣教に同行して、神父が遭遇した危険を耐えて、神父が捕らえられるとガスパルも捕縛された。島(壱岐の島)では前にその名前をあげた3人の神父と一緒に牢屋に入れられて、この問題の解決を

待っていた。その聖なる伴侶と一緒にいてさらに信心深くなった。長崎の奉行権六がマニラから船で来た人々を長崎に連行するように命じた時に、彼と平戸の殿の家来との間にさまざまな議論があって、ガスパル籠手田が長崎市出身だと判るとこの町に送るように命じ、そのように行われた。自分の司祭であり師であったカミロ神父にしばし数日の別れをした。長崎に着くと権六が彼を引き取り、既に殉教に決定されていた多くの信者がいる牢屋（クルス町）に送った。このような立派な仲間に加わってますます熱心になり、他の人と同じように終わりたいと望んで牢屋で断食したり鞭打ちしたりして、死ぬまで耐え忍ぶように我が主に祈っていた。彼を訪れていた両親に善行を勧め、イエズス会の同宿であったので、私たちが方からも見舞いに行った。上に書いたように多くの殉教者があって、修道者も亡くなったその日、彼の祖母アポロニヤも刀によって殺された。非常に愛していた孫に別れを告げる時ガスパルは先に死に行く彼女に、神様はこんなに大きな恵みを与えていたので、神の御前に自分の孫のために最後まで同じように終わることを祈った。何故、その日にガスパルも殺されなかったかは明らかでない。ある人によれば、権六は彼を平戸の返して自分の司祭として殺すことを考えていたという。しかし皆の殉教の翌日、日曜日 9 月 11 日、権六は彼を呼び出したので直ぐ死ぬ準備をして祈ったり、神様にすべての終わりであるあの苦しい戦い、永遠の栄光か、終りのない苦しみか、のために力を下さるよう求めていた。奉行所への道を歩いているときに祈ることがすべてであった。それは、そのような時には非常に大切である。続いて同宿であちこちの教会を神父に同行していたので斬首されることに決まった。そこから直接に前日の殉教者から取り残された 2 人の子供とともに殉教地に連れて行かれた。その 2 人の子供は少年で、その時 1 人は留守をしていて、もう 1 人は不注意のために残されていた。1 人は 12 歳で、もう 1 人は 7 歳であった。聖なる所（西坂の殉教地）に着くと立派な人々や勝れた殉教者の遺体、首でいっぱいだった。その光景だけがもっと老齢の人に恐怖を見せつけることであったが、この少年たちは神の恩寵が強かったので、別の場所や他の方向を向いての斬首を許可しなかった。そこに棄てられた勇敢で勝れた指導者に目を留めて、喜んで創造者に命を返した。最後に斬首された我らの同宿ガスパル籠手田は非常に良い表情をして潔かったので、執行人に仕事をおわらせたようであった。しっかりと首を差し出すと一刀で斬られた。21 歳であった。この 3 人の若者がそのように立派に振舞ったので、その殉教に立ち会った人々は、若者にこれほどの勇気と力を与える神を称賛して帰って行った。首は他の人々の首と同じ場所に晒され、33 首という数になった。彼らは自分たちのために命を捧げた世の救い主のご自分の歳と同じ数字であった。』

『長崎の元和大殉教・ベント・フェルナンデス神父による記録』第 6 章、84～89 頁、
結城了悟著 日本 26 聖人記念館・発行、2007 年

第7章

カミロ・コンスタンソ神父の生涯と殉教

熱心な修道者であり4誓願の誓願者の話でこの記録を終わりたい。カラブリア地方のコセンザに生まれ26歳でイエズス会に入会し、ナポリで勉強中の神学生の時にはその町で労働者の組を世話していた。1602年イタリアからインドに向かって出発し、インドでは長く留まらず、モンスーン時期が近づくとマカオに行った。中国での宣教の望みを抱いていたので熱心に懇願したが、当時巡察師であった良い思い出のあるヴァリニャーノ神父が神から照らされてその許可を出さず、コンスタンソ神父を幸せな終わりに導いた。数人の会員はそれを見て驚き、そのような大きな使命を持っていたコンスタンソを中国へ送る方が良かったのではないかと語っていた。また性格と行いがあの宣教地には非常に適切だと思われていたが、人間の考えと異なる神の知恵は、この（日本）国々で殉教の冠を受けさせるために彼を選んでいたので、当時目上であった人を日本に送るようにと導いた。従って1605年、彼がすべてにおいて正義を行うために従順を守り、ナポリを発った時の望みと目的を犠牲にして日本にやってきた。***有馬では日本語の勉強を終えると、すでに活動の準備ができていたので*豊前（小倉）に住んでいた神父を手伝うように任命された。**

***有馬での日本語の学び**

1605年（慶長10年・33歳）コンスタンチオ神父来日、長崎で出迎えたのは伊東マンショだった。その後、コンスタンチオ神父は有馬のセミナリオで日本語を2年間学んでいる。セミナリオでは、伊東マンショが日本語の習得に手を貸している。

***小倉教会に赴任**

1607年（慶長12年）2月、コンスタンチオ神父（35歳）は小倉教会に赴任。主任司祭セスペデス神父の良き手助けをした。1608年、伊東マンショ神父が小倉教会に赴任。

当時（小倉教会は）非常に盛んな教会で、信者になった武士が多く、大名（細川忠興）が我らの神父たちに名誉と援助を与えていた。そこで2年間の活動後、日本の主な4つの町のひとつ、堺に送られた。そこではこの迫害が始まるまで信者の世話をしたりしてその数を増やしていた。新しい家であったが、まだ教会の建物がなく、カミロ神父は信者に対して非常に良い方法を持っていたので、教会を建てるために広くて便利な場所を彼らは購入することに成功した。段々、建設準備に入った時にこの迫害がその良い望みと計画を止めた。日本と中国の文字を深く学び、この点ではヨーロッパ人の間では珍しいことで、わざわざ異邦人の宗派の研究に力を注いでいた。

マカオに追放（1614年11月）されているときにも同じようにしていた。熱心な修道者で、会則をよく守り、家では些細なことにも不注意を許さなかった。誠実な人でその行動には平和がみなぎっていた。それだから彼が怒っているのを見た人は滅多にいない。迫害の初めに日本に留まろうとさまざまな方法を試みたが、背が高く太り気味なので叶わず、他の多くの宣教師たちと一緒にマカオに行き、そこで終誓願を立て、昨年（1621年）日本に戻

った。

日本のジャンク（船）が東南アジアから帰るときに商品を積んでいなかったの、中国の島々でそれを探しているうちにマカオに着いた。目上たちは日本に神父を送りたかったのでその良い機会を得て、すでに東南アジアから商人に変装して来ていた 1 人の神父以外にもう 1 人を送った。その 1 人はカミロ神父で、自分が日本に来たのは偶然のことで、背が高く太っているの不可能だと思っているときに、目上が日本に帰りたかどうかを尋ねたので、それを受けて可能な限り準備をして船に乗り、世俗の人として長崎に着いた。

ところが彼の行いや他のいろいろな事で世俗の人ではないと見られていたので、皆は彼を注目し、船長はさまざまな疑惑の目を向けていたので、従ってこの町の港に着くと自由に外出を許さず自分に家の傍に連れて行って、船の役人に預けた。翌日彼ともう一人の伴侶を奉行の所に連れて行き、自分も知らなかったこの 2 人のヨーロッパ人が、その船に乗っていたと報告したかった。もし修道者であったとすれば、自分が連れてきたことになり、その罰を受けないようにするためであった。同じモンズーン時期に来たほかの宣教師についての情報があつて役人は警戒していたがその神父と伴侶についてまったく便りがなかった。この危険にあつて、権六（長谷川権六・長崎奉行）の裁判官と家来の前に引き出される準備をしている間に数人の信者の耳にその噂が入り、彼らは船長に話をしに行つて彼の良心と名誉のためだけでなく物質的な利益のためにも、絶好の理由を与えたので彼は理解して考えていたことを取消し、彼らを自由にして直ぐに町から離れるように言った。そのようにされた。

数日間の休息の後、管区長は彼を不動山という所に送った。そこの殿は古くからの信者で、そこは危険がなく誰も彼の家にそのような人物が住んでいるとは想像もできなかった。しかし神は彼をその幸せな終わりのために導いていたので、彼がそこで落ち着いて住んでいるときに殿の知行が別な所と交換された。確かにこの良い神父と*ペトロ・パウロ（ナヴァーロ神父）が捕らえられてことには、人間の考えが間違っていることが明らかになる。

***ペトロ・パウロ・ナヴァーロ神父**

【島原の宣教師団の壊滅の始まり】

1621 年 12 月 21 日、中浦ジュリアン神父（53 歳）は終誓願を聖トマスの祝日に管区長パチェコ神父の前で島原の加津佐村、ミゲル・スケエモン宅内のイエズス会礼拝堂に於いて立てた。中浦ジュリアン神父が終誓願を立てた 6 日後、12 月 27 日、八良尾でキリストの御降誕祭を祝ったナヴァーロ神父は有馬へ下る途中に逮捕されて島原城に連行されて、約 1 年間監禁された後、1622 年 11 月 1 日、島原郊外の今村の刑場で火刑に処せられ殉教した。ナヴァーロ神父と共に捕まったペテロ鬼塚と同宿が島原で火炙りの刑により殉教した。

2 人とも安全な所にいると思われたにもかかわらず危険に遭い、町で訴人たちとすれちがっている者がまだ平和に生きている。カミロ神父は突然助けも抛り所もなくなって唐津に行った。これは（唐津）肥前の国の在る所で、その国の先、筑前に近く、そこに行ったのは、彼の噂を聞いたある信者が彼を呼んだからである。そこにはゆっくり滞在して彼らを手伝

い、そして信心の組を整備したので皆は喜んでいたが、その信者は少数で、神父は既に何日間もそこで過ごしたので、平戸の信者から呼ばれた。

その（平戸の）信者は、既に何年も前から訪問するだけでなくそこに留まってくれる神父を望んでいた。そこでは島にも村にも信者が多く、全部がすべて集落ごとに分かれていて、神父が何年もずっと滞在するためには適した場所であった。神父は行って、そこで大きな実を結んだ。それはある村と島は数年前から訪問を受けたことはなく、さまざまな問題が生じていた。例えば、妻を追い出した人が、今、神父の勧めで再び妻を受け、数人の間で和解させ、特に 2 人の侍の間に生まれただけではなく、過去の償いのために皆の前で鞭打ちを受けた。他の村も訪れ、信者は神父がいることで幸せに思い、また神父はその土地と信者に愛着をもって彼らと霊的な結婚をしていると書いていた。その古い教会は大きく発展して皆のためにずっと牧者がいて、それはイエズス会に人であり、初めからこの 2 つの事が我らの神父によって育てられるのを望んでいたことであった。皆は喜んで満足してすべては平和に行進している間すでにカルロ神父について書いたことであるが、長崎からある修道会の修道者は自分の修道会のもう 1 人の修道者を牢屋から救出しに行った。銀の賄賂とえ牢屋から救出し船に乗せる方法があったが見つかり、平戸の殿の家来の追っ手に捕まった。そこで例の修道者が書いたこの町に住む数人のポルトガル人に送った手紙も見つかった。その手紙ではこの行動を知らせて、協力者に支払う銀を頼んでいた。このことで今でも数人が捕らえられている。殿の家来は彼らを平戸に連行し、拷問によって彼らはすべてを自白し、その修道者の名前も平戸での宿主の名前も教えられた。宿主が捕まって殺される危険があったので、カミロ神父は、夜、牢屋に行って彼の告解を聴いた。これは多くの番人がいたので命がけであった。その後このスペイン人の宿主の妻の告解を聴いた。彼女は日本人で、このような危険なときにその恵みを思わぬ人から非常に感謝された。この良い修道者の迷惑な出来事がなければ、カミロ神父はあの地方で大きな実を結ぶはずであった。すべては平和で、そのためにいろいろな理由で未信者も味方になっていた。しかしこの問題から平戸では大きな騒ぎと混乱が生じて、そこから始まった迫害は早くは終わらないであろう。

今、その地方の信者は試されて非常に脅えているので、互いに信頼しないようである。牢屋から出された人のことですべてが混乱していて、その殿が領地を没収される危険があった。カミロ神父は平戸の人々、牢屋にいる人や他の人の告解を聴いて、そこか別の場所の信者の告解を聴きに行き、3 ヶ月の間、平戸から 5 里ほど離れた他の島、生月でもゆっくり活躍していた。

ここで捕らえられるという事態が起こった。神父の宿主の遠い親戚にあたる異邦人の妻が告解しにやって来て、家に戻ると悪賢い主人を信者にしようとして、我らの聖なる教えについてさまざまな事を話して聞かせた。主人は胸中の悪企みを隠して信者になりたいと言い、いろいろ細々と尋ねた。単純な妻は心底から尋ねていると思い、神父の居場所や行く先を尋ねられて話してしまった。悪賢い主人はすべてを詳しく書きとめて平戸の奉行所に

送り、彼らは我が主至福なるカミロが仲間を牢屋から出した修道者であると思って、彼をどうしても捕らえたくて数隻の早船をその後送った。

カミロ神父は納島という島に向かっていた。神父はその島が通常の道から外れているので、長い間告解をしていなかったその信者を訪ねたが、すでにそこから近くの宇久という別の島に渡っていた。この島は五島の領地である。平戸の役人たちは納島のすべての家屋を捜索したが、そこでは神父は見つけ出すことができず、既に出かけたと聞くと追っ手をかけて宇久の港にあったすべての船を捜して、そこでカミロ神父を見つけた。4月24日であった。船に持っていたすべての物を奪われた。

島が五島殿の領地であったので、そこにいた殿の代官が神父をそこで預かって江戸から返事が来るまで警備するように言われたが、代官は神父を引き取らなかった。その港は良港で、停泊する船は各地からの船で、神父が乗っていたのは平戸の殿の領地からの船で船長も漕ぎ手たちも同様に自分たちがそのことについては好きなようにすると答えた。その理由で平戸から来た人々は、神父と一緒に自分たちの殿の領地納島に連れて行った。そこで1晩泊まって陸に上がり、神父には、船から出て食事に招待したかったと丁重に言った。カミロ神父は招待を断ったが、是非にと頼まれたので陸に上がって、そこで多くの尊敬のしるしをもって歓迎され上等の食事でもてなされた。

ここではイルマン・アゴスティーニョ太田と同宿ガスパル籠手田が捕らわれたが、未信者であったのに神父に対してそれほどの尊敬を示したので縛るには勇気が出ないと言った。

この取り扱いと尊敬が、ここ長崎ではこの野蛮人が使う方法とだいぶ違うことで、昼夜、修道者を探し回り残酷に彼らを捕縛することを夢見ている。翌日、皆と一緒にこの港から出発して、神父は兵士や武器を手にする人々に警備されていた。自分の船に乗せていたヨハネ源左衛門は生月の出身で、近づいていくと殉教者たちが互いに別れを告げ、神父は既に捕らえられていた自分の宿主に良い勧めをして、自分の望みが我らの救い主キリストのために命を捧げることであつて、既にその望みが全うされようとしているので、良い信者として死ぬまで神の栄光のため続けるように励まし、何回も宿を提供していつも大きな愛を示したことに感謝した。徳の高い宿主は、自分の決心はいつも死ぬまで神父に随って行くことであつたが、今、許されないので留まり、神の聖なる奉仕に終ることが出来るようにと祈りを願った。同じように神父は深い愛を持ってイルマン・アゴスティーニョと同宿ガスパルとに別れを告げ、彼らは皆の最初の者として殉教の冠を受けた。翌月には斬首され、その生涯と殉教の記録に見られるように勇敢にキリスト教的に死んだ。

カミロ神父を唐津まで探しに行ったリアン（利庵？）という信者も捕らえられた。殿の家来が彼に尋ねたことは、自分が連れてきた神父は平戸で仲間を牢屋から救出した人であつたかどうかと、それにはダミアンは落ち着いて、そうではない、今の神父はカミロ・コンスタンソと呼ばれていて、他の人と名前も修道会もだいぶ違う者である、と答えた。それを聞いて未信者は、彼にそうであれば貴方の罪はもっと軽い、と言った。

ここを出て平戸に神父を連れて行き、奉行たちは裁判所で神父を取り調べた。彼が書いた

手紙で起こった事が知らされるので、ここではそれを抜粋する。長崎の院長に書いた手紙では次のように言っている。

「神父様は私が捕らえられていることは既に御存じでしょう。多分、私に手紙によるかもしれない。神父様も他の人も悲しんではいけません。それどころかこんなに大きな恵みのために神様に感謝するように祈っています。私はこれ以上大きな恵みを望むことが出来ませんでした。場所を決めるのに神父様のもとに人を送りましたが、彼が遅かったので納島という島に行くようになりました。危険があつて同じ場所に留まることが出来ませんでした。そして信者たちがそのように決めたのでイルマン・ニコラオと 1 人の若者を多くの人が危険に遭わないようにと別の所に送りました。もし 1 日も遅れていたら皆一緒に捕まっていたでしょう。4 月 24 日、五島の宇久という島に後退し。そこまで平戸の牢屋から仲間を救出しようとした修道者を捜して船 3 隻が着きました。この未信者たちは丁重に私を取り扱い平戸まで連れてきて、2 人の裁判官に渡しました。彼らは私が誰かと尋ねました。私はイエズス会の修道者でカミロ・コンスタンソだと答えました。また何のために日本に来たのかとの問いに、私はそれを説明して準備していた弁明書を渡しました。最後に、何故、日本の主である将軍に従わなかったかと尋ねられました。私は、私の教えが従順を命令しているが、それは神の教えに背かない限りであれば、例えば、福音を教えないこと、その場合には従うことはできないと答えました。

彼らに 1 人が、すぐに私は殺されるはずだと言って首に縄をかけて、その夜、壱岐の島といわれる島に追放されました。今、2 人の修道者と一緒にそこにいます。1 人はアウグスティノ会、もう 1 人はドミニコ会（この 2 人はしばしば私が話したマニラから来て、イギリス人が捕まえた船に乗っていた 2 人です）たいいてい四旬節の食事のような米と野菜だけで時には少しの魚です。牢屋は閉じてはいませんが、番人が多く彼らに我らのことについて説き、皆は賛成して、将軍の命令がなければ信者になるはずです。江戸からの返事を待っています。神の御旨になりますようにすべてのために準備が出来ています。皆さんは祈りのときに私を忘れないように、すべての兄弟たちの祈りを願いますし、私の多くの過ちを赦して下さいますように。私のために祈ってください。昼も夜も私はイタリアの詩人の言葉を考えながら死を待っています。

En fim de una prigione escore agli animi gentil, agli alteri e noia.

最後にまた、**Un bel morir tutta la vita honora.**（立派な死に方が生涯に名誉を与える。）

6 月 11 日」

その島（壱岐の島）に送られた後（島は平戸から 12 里離れていて、海は朝鮮への道で沖にはそこを渡る船がこの島に立ち寄り、港で帆を揚げる時と状態を待っている）具体的ことは知られていない。長崎からは遠くて通常の道から外れていて、この町（長崎）から船が近づかないように厳しい警備がしいてある。必要なものを彼に送るためにいろいろな方法が試されたが、手紙さえ滅多に届かなかった。この良い神父はいつも殉教者になるとい

う望みを育んでいて、それを表わした。旅では、修道者が閉じ込められていた鈴田の牢屋に近づくと『聖なる家』とあの牢屋を呼んでいて、その近くにいるのは楽しいことだと書いていた。書いた手紙には、あの島に追放されているとき喜びでいっぱいだったと書き、それは長年、前からそのことを望んでいたからである。平戸では首に縄をかけられて裁判官たちにこの理由のために捕縛されるのを何年も前から望んでいたことだと言った時に、彼らは捕縛されるのを望むのは馬鹿なことだと言ったので、詳しくその望みの理由を説明した。有馬の院長で信仰のために捕縛されたペトロ・パウロ（ナヴァーロ）神父に書いた手紙では次のように言っている。

「最後の便りには、神父様は私が殉教者か告白する人になることを望んでいると書きました。敬愛する神父様、既に我が主は平戸の 2 人の裁判官の前でその信仰を告白して、それでこの島に追放されました。多分、神父様より先に行くかもしれません。確かに神様からこれほど大きな恵みを受けるには相応しくありません。」

この牢屋から死刑が決定されると首に掛けて持っていた聖骨箱を管区長に送り、聖骨箱の袋の中に終誓願と他の紙に 4 誓願の誓願者が立てるほかの誓願書も神に書いて持っていた。管区長はこの聖骨箱をこの管区の物になると決めた。未信者たちは、彼の遺骨を持っていくのを許可しなかったので、せめてもそれはこの徳高い勝れた人の記憶が残るように。

その殉教は 9 月 15 日にあつて、その話を殉教に与った平戸の信者が書いた。牢屋の他の 4 人の仲間が既にいろいろの場所や戦いで勝利を得ていたので、その島に 1 人になった彼を捜しに行った。カミロ神父は勇敢な人で、経験豊富な指導者として 1 人でイエズス会に名誉を与え、火に打ち勝つためには 1 人で十分であった。彼が乗っていた船が平戸の殉教に定められた場所の前に碇を下した。小さな船で殿の 6 人の家来が迎えに出た。船の船室からイエズス会の帽子と服を身に着けて出てきて、そこまで伴ってきた人と望まれた死に向かって行くために、捜しに来た人々に感謝した。その殉教に立ち会うために平戸に行った長崎の奉行権六の家来を待っていた。将軍は、長崎の殉教者だけでなく周辺の地方の殉教者たちも権六に一任した。その理由で長崎の郊外で行われたそのような死刑に、たいいてい自分の代理としてその殉教の采配を振る家来を送っていた。カミロ神父はその人々を見て、権六殿の家来であるかどうかと尋ねた。彼は笑みを浮かべながら非常に良い顔をしていたので、皆は驚いていた。彼らがそうであると答えたので神父は一礼して、自分のために遠方からわざわざ来たことに感謝した。そのとき平戸の殿の家来が殉教者に、何処の国から来たのかの問いには、イタリアからだと言え、いつ日本に来たのかには、17 年前に来てそのうちの 1 部を堺で過ごしたと言った。年齢を問われたが、それを知る必要はないが、もし知りたければ 50 歳だと答えた。尋問者はすべてを記録し、その後平戸の奉行たちに見せに行った。殉教の場所が町の外の海に近い長崎側の海岸で、その場所はいろいろの方向から眺められる。町では珍しさにその光景を見に行った人が多かった。ある者は海から。屋

の者は陸から、港にいたオランダ人たちもこの徳高いヨーロッパ人がこの世の果てにどんな死に方をするかを見届けに行った。場所は既に準備されていて、彼と処刑場の周囲には柵ができていて、その真ん中に木柱が立っていて、その周りに沢山の薪が積まれていた。この点でこの殉教は長崎の殉教とは違っていた。小さな船で迎えに行った人々は彼の外套をはがしてそのまま大きな喜びを持って下船し、浜から殉教地までの距離は日本の1丁位で、大急ぎで歩いていったので、それを見た信者たちは、このパライソへの道のように普通はそんなに急いで歩けなかったと言っていた。

殉教地の柵の中に入った時、声高らかに自分はイエズス会員で、名前はカミロ・コンスタンソ、イタリア出身だと言った。もし群衆の中にキリスト信者がいるならその事を知っておくように。竹で編まれた縄で柱に縛り付けられた。自分がこれほど望んでいた場所において、古くからの望みが全うされると分かって、群衆が1番集まっている方に向き直った。縛り付けられた時に顔が人のいない方に向いていたからである。そのようにしたのは、皆が自分の最後の説教を聴くのを望んでいるからであった。

最初の言葉は、何故、死んでいくか、であった。それは、我が主と救い主の教えのためである。あの高い説教台から声高にその話題を述べ、言葉と話題がその日の機会と時に適ったものであった。『身体だけを殺す人を恐れなくてください。』

日本語でその言葉を説明して、身体は遅かれ早かれ最後には灰になるので私の身体について何をやってもよろしい。

しかし永遠に生きる私の魂に対して何もできない。我らの神父を縛り付けた人々は薪がもっと早く燃えるように火をつけて柵から出た。中には天使たちが伴ってキリストの兵士が残り、もう1度大声で皆が聞くように、救いのためには唯一つの道しかない。それは自分がその教えのために焼かれながら死んでいくその教えである。他の教えはごまかしであり、作り話である。と言った後の火は強く燃え上がり煙で何も見えなかったが、その炎の中から日本語で熱烈に説教した。彼の姿が再び見えた時は祈っているような姿であって、もう1度声をあげて『すべての民よ、神を褒め称えよ・**Laudate Dominum omnes gentes!**』を歌い、栄唱まで続き『世々に至るまで』という言葉で皆は彼の命が終わって永遠の命が始まったと思っていたが、そんなに早く我らの殉教者の命は終わらなかった。もう1度ラテン語と日本語で説教し、火力と煙が強かったのか、望まれた瞬間がやって来たのか、あるいは神がその時に慰めを与えていたのか、良く分からないが、1番火力が強いその火を気にしないで、日本語でこの地方の人があることで非常に満足する時に言う言葉

『おお、私は何と幸せであろう』と3回も繰り返すのが聞きとられた。

炎がいつそう燃え上がり、遠くから見ていた人々にも恐れさせた。至福なる神父の服がもう上がり、初めは雪のように白く見え、後で黒くなった。人々はこのとき殉教者の魂が身体を離れてパライソの幸せに入ったと思ったが、そうではなかった。最後のすべてのまとめのように遠くにも聞こえるように全力を振り絞って声をあげ『聖なるかな・**Sanctus!**』を5回唱えて、この聖なる言葉をもってキリストの勝れた殉教者カミロ・コンスタンソ神

が語るがままに任せておいた。

神父は、聖書の文句を引用して『身体を殺すものを恐れるなかれ。』（ルカによる福音書 12 章 4 節）といった。そして、この崇高な説教座から出た光輝ある雄弁は、魂の底まで沁み透るのであった。この殉教者は、己が火炙りと血の流出とをイエズス・キリストに於ける信仰の明白な證據（証・拠り所）として、人目を惹いた。実は、このことは長年、彼が日本で説教してきたものであった。

彼は、身の周りに、焰がぱちぱち音立てて燃え上がった時、じっと動かず、しかも至って朗らかであり、最後まで崇高な*説教を止めなかった。次いで、彼は渦巻く煙の中、いな焰の真只中で、最後まで、総ての殉教者たちのこの栄ある歌『諸人挙りて、主を讃めまつれ・*Laudate Dominum omnes gentes!*』を終わりまで歌い、そして 5 度『聖なるかな・*Sanctus!*』を唱え、彼は既にセラフィム（最高の天使たち）たちの中にあるかの如くに、主に靈魂を返し、永遠の聖歌を続けようとしていた。

彼の修道服は、燃えつくして、彼の体が白く見え、次いで黒く見えた。彼の遺骸は、海中に登記されキリシタンたちは、まったくどうすることも出来なかった。コンスタンチオ師は 50 歳を少し出たばかりで、イエズス会にあること 30 年、4 誓願の請願者であった。

異教徒たちは、皆深く狼狽し、無我夢中で帰って行った。』

*彼は『おお、私は何と幸せであろう』と何回も繰り返すのが聞きとられた。

『日本切支丹宗門史、中巻』245～247 頁、第 7 章、1622 年、レオン・パジェス著

【カミロ神父の宣教を手助けして殉教したキリシタンたちの家族たちの殉教】

『日本切支丹宗門史、中巻』330～333 頁、第 7 章、1624 年、レオン・パジェス著

『平戸とその地方では、38 人のキリシタンが殺された。この地方の大名で、只管將軍の寵を欲し、何よりも所領の安堵を望んでいた松浦肥前守隆信は、猛烈に迫害して、多数の殉教者を出した。真先に槍玉に上げられたのは、2 年前、彼が將軍の意に従うために殺したキリシタンたちの妻子であった。誰にも容赦はなく女中や年の行かない子供でさえ同じであった。

デ・コンスタンチノ師の宿主で、1622 年に殉教した*ガブリエルの家族は、このことに連座して隣人の護衛の下に監禁されていた。この年（1624 年）家族は全部死刑になった。役人は、真夜中に、家内に押し入って、婦人たちが着るだけの着物をわずかに残して、一切の物を押収した。婦人たちは声高らかに祈っていた。卒達が沈黙させようとするると彼女達は答えて『お前様方は妾達から浮世の実を取り上げなさるが、何でも、少なくとも妾達の靈魂の実、つまり靈的のお実はおいて行って下され。』

ガブリエリ（一ノ瀬金四郎）の祖母マリアは、既に 90 歳を越え、妻のガラシャは 50 さい

であった。息子のリノは21歳、娘はマリアというのが2人、18歳と11歳、リノの妻は19歳であった。下婢セシルの年は不明。その子のミカエルは3歳、マリアというもう1人の下婢は22歳であった。

尊敬すべき祖母と下婢の子を除き、彼等は全部縛られた。この下婢の子は、卒の1人が腕に抱いた。次いで一行は、コチドマリ（河内か）という殉教場所に行くために乗船した。出発の際、ガラシャはロザリオを外して、夫と共に別れに来たもう1人の娘に遣わした。更に十字架を見せて、彼女は『これだけで沢山』といった。そして彼女は恭しく之を押し接吻した。

祖母は、身分の低い人に殺させぬという日本の風習に従って、親戚の1人から首を刎ねられて、最初に息を引き取った。リノと2人の姉妹も同じく、高位の侍から首を刎ねられた。ガラシャは彼女の息子が天国に入り、2人の娘が真の魂の夫、即ち我が主イエズス・キリストと結婚したのを見て、悦んでその後を追った。そこで間もなく、他の犠牲者たちが犠牲を成就した。

遺骸は蔽はれ、更に蓆（むしろ）に包まれ、石を付けて沖に沈められた。この殉教は3月3日であった。

（註・ガブリエルの家族は何れも平戸の者たちであった。6人は同じ町に生まれ、2人の女中は生月島の生まれ。ガブリエルの妻マリアは獅子で生まれた。祖母のマリアは既に大人になってから洗礼を受けたが、日本に於ける最初の改宗者の1人であった。他の人々は生れ落ちるより洗礼を受けた人たちであった。日本の新年の頃、ガラシャは自分の手で2人の死者を葬り、異教徒から大いに感心された。何となれば、この頃には誰も死者の名を呼ぶことさえしなかったからである。ガブリエルの妻マリアの首級は、体が半分に離されてもイエズス、マリアの御名を唱えていたと言われる。残酷な卒は遂に首を切り落とした。）

3月3日とそれに続いて、薄香で一家全部が斬罪にあった。76歳の戸主のルカス・森平兵衛は嘗て（かつて）デ・コンスタンチオ神父の宿主をしたことがあった。妻のマリアは72歳、夫の殺された日には留守であったが、駆けつけて同じ栄冠を得た。彼等と共に、子や孫達も、86歳の老人*アントニオ・次郎兵衛と共に殺された。

（註・息子のアレキシスは47歳であった。ルカス、アレキシス、及びアントニオは生月島の人であった。ルカスは聖イグナチオの会を創っていた。アントニオはかつてコンスタンチオ神父の宿主であった。マリアは僅かに2年前に洗礼を受けた。長男のトマスは10歳、ディオニシモは5歳、2、3日前に生まれた女の子はまだ洗礼を受けてなかったが、血の洗礼を受けた。）

3月5日、1623年に殉教した*ダミアンの家族が全部殺された。それは彼の老母イサベラ74歳と、妻のベアトリスと4人の子供たちであった。イサベラは、生前に、彼女の身内の者が皆、霊肉両方の危険から解放されて、永遠の生涯に到達したのを見届けるために、1番

最後まで残ることが出来たのであった。

彼等は、船で中江ノ島に連れて行かれると、自分から殉教のために出かけたヨハネ・坂本の家族も亦（また）着いていた。彼等は、親しく禮（れい）を交わし、天に於ける再会を期した。

***ダミアンの家族**は、中江ノ島の地獄という所で殺された。これ等犠牲者たちの伴侶は 1622 年に殺されたヨハネの寡婦マリアと、その子 4 人であった。マリアと 10 歳になるその子ペトロは、前の人の刑に立ち会ったうえ、殺された。3 人の他の子供、即ち 25 歳、23 歳 1 歳の若者たちは、沖に連れ出され、首にだけは別の袋を冠され、俵に詰めて縛られた。彼等は、投棄される前、皆一緒に縛って貰いたいと請うた。自然の縁と同時に、イエズス・キリストの愛情という超自然の縁によってもつながれて、一緒にいたこれ等の兄弟たちは、死ぬ時も、死後も離されず、共に永遠の光栄に到達した。

（註・ダミアンの家族はベアトリスが最初に死に、次いで 12 歳のパウロ、9 歳のヨハネ、7 歳の末子イサベラが息を引き取った。イサベラは母親の死骸の上にひれ伏したままで捕吏に捕らわれ、剣の 3 撃で殺された。次に 13 歳になる長女のマグダレナ、最後に、尊敬すべきイサベラという順であった。ベアトリスは生月島の館ノ濱で生まれ、イサベラも同島に人であった。）

3 月 6 日、平戸の河内で、***ミカエル・山田平右衛門**（37 歳）と妻ウルスラ（34 歳）と 3 人の子供が殺された。ウルスラは、夫と子供 2 人が死ぬのを見届けてから、涙に溢れた目を天に向けて、我が主に感謝し、自分の命と末子、すなわち 2 歳の幼いマグダレナを犠牲として捧げた。

（註・ミカエル・山田平右衛門は大和の人で殉教の時、7 歳の長女クララを抱いていた。妻ウルスラは筑後の人で殉教の時、未だ乳飲み子のマグダレナを胸に抱いていた。長男ヨハネは 13 歳だった。）

3 月 8 日、1622 年のもう 1 人の***殉教者ヨハネ・雪ノ浦次郎左衛門の寡婦カタリナ**が殺された。彼女は武士の女で、或る大名の後裔であった。彼女の心を誘うために到底信じられぬほどの努力が払われた。結局、その門地などにお構いなく、裸にして木に縛られた。彼女はもっと苦しむために、方々から血が流れるほど、木に体をぶつけて我が身を傷つけた。異教徒たちはキリシタンが、遺物として持ち出すことを恐れて、この血止めをした。彼女は愈々斬首の宣告を受け 48 歳を一期として、花々しく死を遂げた。

（註・カタリナは生月島の一部の人であった。彼女とその夫は、度々神父たちを匿ったことがあった。）

***他の人々も亦（また）別に殉教した。**平戸のこの迫害は格別で、2 ヶ月半続いた。棄教者まで容赦されなかった。

(註・トマス・又市(35歳)は平戸の島の獅子に生まれ、1622年に追放された。ところがこの年(1624年)他の村で発見されて、彼は大名の命令で小島に連れ出されて、4月3日、斬首された。

ヨハネ・渡島兵衛とその子ルカは、田ノ浦(水ノ浦)に生まれた人。8月18日に斬首された。

河内の島で生まれたキリシタンの老女マルタは異教徒の婿(むこ)に追い出され、野良で凍え死んだ。

田ノ浦(水ノ浦)に生まれ、平戸の町に住んでいたヒエロニモ・市蔵(25歳)は弱ったように見えた。立派なキリシタンであった彼の義父は、彼の妻を取り返した。市蔵は自分の過ちに目が覚めて、後悔の情を表わした。奉行はこのことを聞き、ヒエロニモに死刑の宣告を下した。彼は8月18日斬首された。

若干のキリシタンが、秘かに殺されたが、その名前は不明である。)

この同じ年(1624年)、教会にとって最大の敵である1人は君主の兄弟で、他は領主の極めて近親者である、2人が死ぬことになった。前者はその兄弟、すなわち大名との間に起こった一寸とした意見の衝突から割腹した。後者、すなわち、迫害とカミロ神父の召捕りの張本人は急死を遂げ、瞬く中に、浮世の幻影から、永久の苦悩の現実に移った。

五島の領主、宇久淡路守玄雅(五島殿、霊名ルイス)は、将軍の意に添うために、殉教者を出さんとした。彼は教会の看坊で、他のキリシタンたちの教師である***カリクスト・九衛門**を斬首させた。***若干他にも犠牲者**があつた。

(註・***カリクスト・九衛門**(57歳)は日向で生まれ、14歳の時、豊後で洗礼を受けた。彼はおよそ30年間、神父たちの伝道士であった。彼は若松に住んでいた。彼は1624年、ここから1リユ離れたタブー(高松)で殺された。

ミカエル・鳥居甚之丞(62歳)とパウロ・金左衛門が、4月19日に斬首された。

ミカエル・鳥居甚之丞は、子供の頃、小値鹿で洗礼を受けた。パウロ・金左衛門は都(京都)の人であった。)

『日本切支丹宗門史、中巻』330～333頁、第7章、1624年、レオン・パジェス著